퐾 4 盐 华 2 (19) 日本日本日(1 b)

特許第3329819号 (II)格容格中 (B2)

(24)登録日 平成14年7月19日(2002.7.19) (P3329819) ZNAA 8 12/00 2/00 AOIH C12N (45)発行日 平成14年9月30日(2002.9.30)

机则配料 ZNA

> C12N 15/09 8

2/10

C12N A01H (51) Int.Q.

謝泉項の数34(全 22 耳)

(21) 田田前	特配平7 —508037	(73) 存弃指令	666666666
			日本たばこ産業株式会社
(86) (22) HINTE	平成6年9月1日(1894.9.1)		東京都港区虎/門2丁肖2番1号
		(72) 発明者	拉爾 核杂
686) 四数出版等中	PCT/1P94/01442		静岡県磐田郡豊田町東原700 日本たば
(87)田原公開番号	WO95/06722		ご産業株式会社遺伝育種研究所内
(81) 国际公园日	平成7年3月9日(1995.3.9)	(72) 発明者	石田 祐二
発売を対し	平成10年3月3日(1998.3.3)		静岡県磐田都豊田町東原700 日本たば
(31) 優先権主政部号	存置平5-243975		乙酰菜株式会社遺伝者超研究所内
(32)條先日	平成5年9月3日(1933.9.3)	(72) 発明者	福江井 枯弘
(33) 優先相主張国	日本(JP)		舒何県磐田都豊田町東原700 日本たば
(31) 優先權士班每号	特四平6-27320		こ弦樂株式会社遺伝青翅研究所内
(32) 優先日	平成6年1月31日(1994.1.31)	(72) 発明者	小個 数据
(33) 優先権主張国	日本 (JP)		静岡県磐田郡豊田町東原700 日本たば
			い商業株式会社書伝売物研究所内
		(74) 代理人	666666666
			弁理士 谷川 英次郎
			> 神心直線管

(54) 【発明の名称】 米熱胚の胚盤を用いた単子葉植物の形質転銭方法

「加米項1]所望の遺伝子を含有するアグロバクテリウ ム価細値で単子葉植物の鵜分化処理していない未熟胚の 胚盤を形質転換し、形質転換体を得ることからなる、単 子集植物の形質転換方法。 (37) [特許請求の範囲]

【精求項2】アグロバクテリウム風細菌で単子葉植物の 税分化処理していない未効胚を形質転換し、形質転換体 を得るにあたり、数米熱胚の形質転換が数アグロバクテ 【請求項3】アグロバクテリウム属細菌で単子葉植物の **梲分化処理していない米熱胚を形質転換し、形質転換体** リウム阿細菌と蔵未熱胚とを接触させた後、共存培養す を仰るにあたり、数米禁配の形質転換が設アグロバクテ リウム両細菌と酸未熱胚とを共存培養することからな 5. 請求項1記載の単子蒸植物の形質転換方法。

【請求項4】数共存培費が個体培地上であることを特徴 とする語求項2または3のいずれか1項記載の単子業値 の単子繁植物の形質転換方法 物の形質転換方法。

体を得ることからなる請求項1乃至4のいずれか1項記 「請求項5」所望の遺伝子を含有し、かつTiまたはRiプ ラスミドを持つアグロバクテリウム區細菌で単子葉植物 の脱分化処理していない未熟胚を形質転換し、形質転換 銀の単子葉植物の形質転換方法。

【請求項6】数TiまたはRiブラスミドが始展原性アグロ パクテリウム由来のものである請求項1乃至5のいずれ か1項記載の単子葉植物の形質転換方法。 2

【翡求項7】数アグロバクテリウム属細菌が強病原性ア グロバクテリウムに含まれるTiまたはRiブラスミドのヴ 4ルレンス領域由来のDNA領域を含む請求項1乃至6の

5ことからなる、韻水項1または2のいずれか1項記載

特許3329819

RIブラスミドと所望の遺伝子を含有するブラスミドが異 なる請求項13乃至17のいずれか!項記載の単子禁植物の

「請求収8」数アグロバクテリウム属価額がTiまたはRf

いずれか1項記載の単子集植物の形質転換方法。

ブラスミドを持つアグロバクテリウム植倒であって、さ らに強威原性アグロバクテリウムのTiまたはRiブラスミ を導入した精水項1乃至7のいずれか1項配載の単子葉

ドのヴィルレンス領域由来のDNA領域を含むプラスミド

【語求項19】数アグロバクデリウム価細値が所知の過 伝子を含有するブラスミド上に強減原性アグロバクテリ **ウムのTi またはRi ブラスミドのヴィルレンス奴奴由来の** DNA析片を含む耐水型13万至18のいずれか! 収配扱の単 子菜植物の形質転換方法。 【請求項20】数アグロバクテリウムに含まれる下また

る耐水項1乃至8のいずれか1項記載の単子葉植物の形

「静末項10】数アグロバクテリウム属細菌が所望の遺 伝子を含有するプラスミド上に敬虜原性ア グロバクテリ ウムのTiまたはRiプラスミドのヴィルレンス伽域由来の

DNA断片を含む静水瓜1万至9のいずれか1 現記載の単

「請求項 B 】数アグロバクテリウム属相菌がTiまたはRI プラスミドと所望の遺伝子を含有するブラスミドが異な

植物の形質転換方法。

アグロバクテリウム ツメファシエンス (Agrobacteriu m Tumefacions) A281のTiブラスミドpTiBo542のヴィル レンス領域由来のDVA領域である請求項13乃至19のいず はRiブラスミドのヴィルレンス領域由来のINW断片が、 れか1項記載の単子禁値物の形質転換方法。 2

なくともvin及びvincを含む観域である請求項13万至20 ことを特徴とする翻求項13乃至21のいずれか1項配載の 【静水項22】 放共存培養と散分化処理を同時に行なう 【群状成2 I】数グィルフンス競技由来のINA配技が少 のいずれかし項記載の単子供植物の形質転換方法

【醋求項23】 数未熱胚との接触するアグロバクテリウ 4属相関の協議度が10~10、相俗/mlであることを特徴 とする、御水項1乃至22のいずれか1項記載の単子禁植 物の形質転換方法。

なくともvin及びvincを含む領域である請求項1乃至11

のいずれか!項記載の単子集植物の形質転換方法。

【請求項13】アグロバクテリウム属相随で単子禁値物

の脱分化処理していない未熟胚を形質転換し、形質転換 テリウム両細菌と故未熱胚との接触時以降、脱分化処理

体を得るにあたり、酸末熱胚の形質転換が酸アグロバク

単子葉植物の形質転換方法。

2

アグロバクテリウム ツメファシエンス (Agrobacteriu

m Tumefacions)A281のTiブラスミドpTiBo542のヴィル

レンス領域由来のDAA領域である語求項1乃至10のいず 【指求項12】数グィルフンス領域由来のDNA競域が少

hか1項記載の単子葉植物の形質転換方法。

【請求項11】数アグロバクテリウムに含まれるTiまた

子葉植物の形質転換方法。

はRfブラスミドのヴィルレンス領域由来のDNが片が、

ム属細菌との接触が、数アグロバクテリウム属細菌の懸 数数数液中の磁液度が10~101. 植物/mlであることを特 強とする、前求項1乃至23のいずわか1項記載の単子集 [請求項24] 数未熱胚と復独する数アグロバクテリウ **関液中に散水熱胚を投消することにより行ない、かつ、** 細胞の形質転換方法。

【韻水頂25】数未熱胚が、 母素処理や付傷などの何処 理が行われていない未拠胚である間求項 1 乃至24のいず 【請求項26】数未熱胚が、受物後2日目以降の未熟胚 れか1項記載の単子葉植物の形質転換方法。

することをさらに含む、 翻水項 1 ないし12のいずれか 1

項に記載の単子葉植物の形質転換方法。

【翻求項14】所望の遺伝子を含有し、かつTiまたはRi 物の成分化処理していない未熱胚を形質転換し、形質転

ブラスミドを持つアグロバクテリウム属細菌で単子葉植

段体を得ることからなる請求項13または14のいずれか1

項記載の単子葉植物の形質転換方法。

であることを特徴とする、請求項1乃至28のいずわか1

する静木項1乃至26のいずれか1項記載の単子葉植物の 【請求項21】数未熱胚が、正常な個体を再生する能力 を有するカルスを誘導できる求熱胚であることを特徴と **項記載の単子葉植物の形質転換方法。**

40 形型転換方法。

【指水項16】数アグロバクテリウム属相関が強成原性

hか1項記載の単子葉植物の形質転換方法。

アグロバクテリウムに含まれる下またはRiブラスミドの

ヴィルレンス領域由来のDNA領域を含む請求項13乃至15

のいずれか1項記載の単子葉植物の形質転換方法。

【請求項17】 酸アグロバクテリウム属相箇が下または さらに強病原性アグロバクテリウムのTiまたはRiプラス

RIプラスミドを持つアグロバクテリウム抽搐であって

【請求項15】数TiまたはRiプラスミドが強肩原性アグ ロバクテリウム由来のものである耐求項13乃至14のいず

【請求項29】数未熱胚を形質転換するアグロバクテリ せ、脱分化状骸にて形質転換細胞の選抜、増殖を行ない 形質転換体を得ることを特徴とする糖水質1乃至2700い 【請求項28】形質転換後、形質転換細胞を貼分化さ ずれか!項記載の単子策植物の形質転換方法。

ウム医部協が、アグロスクテリウム ツメンァシェンス る請求項1乃至28のいずれか1項記載の単子禁植物の形 (Agrobacterium Tumefaciens) であることを特徴とす

【請求項30】 酸未熱胚が未熱胚の胚盤であることを特

8

「請求項18] 酸アグロバクテリウム原相菌がTiまたは

ドを導入した請求項13乃至16のいずれか1 項記載の単子

業植物の形質転換方法。

ミドのヴィルレンス領域由来のDAA領域を含むブラスミ

ව

€

致とする請求項!乃至29のいずれか!項記載の単子集権 均の形質転換方法。 【加水項31】数単子森植物がイネ科植物であることを 特徴とする開水項1乃至30のいずれか1項記載の単子変 植物の形質転数方法。 「翻写項32】数イネ料額初かイネまたはトウモロコンであることを特徴とする額収収1乃至33のいずれか1項3数の単年額の中でものできる形成の形質を対抗。

(説水項33)数イネ料植物がイネであることを特徴と

する諸塚虹 | 乃至3のいずれか | 項記載の単子葉値物の 投資転換方法。 [結塚項34] 数イネ科植物がトウモロコンであること 経特数とする諸塚斑 | 乃至33のいずれか | 項記載の単子

【発明の詳細な説明】

素植物の形質転換方法。

技術分野

本発明は、単子禁植物の形質転換方法に関する。 解験技術 中子素植物の形質情数方柱としては、従来より、エレ クトロポレーション街、ボリエチレングリコール街(R G芸)、パーティクルガン法やの他が知られている。

20

エレクトロボレーション社は、プロトグラストと目的のDwを結合し、電気物数で細胞原に穴を開けることによりDwを結節のに環境を図る方在である。この方法で書々の遺伝子が中午集値物、特にイネに導入されている (Torivana K.et al.,1985:biotech,6:1072-104,5/inamoto K.et al.,1985:biotech,6:1072-104,5/inamoto K.et al.,1985:biotech,6:1072-104,5/inamoto K.et al.,1985:biotech,6:1072-104,5/inamoto K.et al.,1985:biotech,6:1072-104-2073,6/inamoto K.et al.,1985:biotech,6:1072-104-2073,6/inamoto K.et al.,1985:biotech,6:1073-204-2073,6/inamoto K.et al.,1985:biotech,6:1073-2075,6/inamoto K.et al.,1985:biotech,6:1071-2075,6/inamoto K.et al.,1985:biotech,6:1072-2075,6/inamoto K.et al.,1985:biotech,6:1072-2075,6:1072-2075,6:1072-2075,6:1072-2075,6:1072-2075,6:1072-2075,6:1072-2075,6:1072-2075,6:10

FC姓は、目的遺伝子とプロトプラストとを語合し、PCC処理することによって遺伝子の導入を図る方法であり、エレクトロポレーション法とは電気倒微がRCAC変わった点で異なる。導入効率はエレクトロポレーション社よりはいくふん低いと考えられる。この方法で形質を複体を招た報告はあるものの、近く用いられているとは首い難い。プロトプラストを用いるため、エレクトロポレーション社と同様な問題点を持つ(Chang W. et al., 1990; Biotech, 8:75-740)

\$

また最近、弱い酵素処型をしたトウモロコン未熟胚およびカルスに電気刺激によって遺伝子を導入する方法が 似母された(D'Italluín K.et al.,1992;Plant Cell 4:1495-1505)。導入された遺伝子の存在は用分化植物 体においても確認されている。しかし、まだこの方法で

の形質転換の成功倒は一報のみである。

バーティクルガン法は、目的の遺伝子を復組な金属粒子に付着させ、金属粒子を高速で細胞あるいは組織に撃ち込むことによって形写気後を行わせる方法である。従って、原理的にはあらゆる組織を対象に形質転換を行なうことができ、特にプロトプラストからの再生系が確立されていない植物圏に有効であるとされている。

今までにトウモロコンではタイプエカルス(Amstron GCen C.E., 1985; Planta 164:207—214)を 材格にバーティクルガン技化より影響成換を行ない。そ こから正常な性性を有する影響成換体を得た組合がい、 つかある(Gordon-Kam W. J. et al., 1990; Plant Call 2:603—618, From M.E. et al., 1990; Plottech. 8:833—83 3.Walters D.A. et al., 1992; Plottech. 8:833—83 の Vain Pet al., 1992; Plant Mol. Biol. 18:189—2 しかし、これらの報告のほとんどは、培養容易性の品質 を材材として使用してみり、まだ、あらゆる品種に適用 できる技術には至っていない。

Vasi15はパーティクルガンによってコムギのエンブ リオシェニックカルスにパスタ、ピアラフォス等の係草 剤の主成分であるホスフィノスリシンをアセチル化する bar遺伝子(Thompson,C.1.et al.,1987;bl80 1.6:2519 -2523)とOLS遺伝子を導入し、パスタ抵抗性のカルス および再生植物体を得れ。これらのカルスおよび再生植 物体における、導入遺伝子の産物である解素の活性を確 認し、またbar遺伝子が存在することをサザン分析で確 超した(Vasi1 V. et al.,1992;Biotech,10:667-67

Liらはバーティクルガンによってイネの未熟版および 30 エンプリオジェニックカルスにハイグロマイジン選抗性 遺伝子を導入後、競技を行ない、ハイグロマイジン選抗 性再生植物体を得た。この植物体でのハイグロマイシン 抵抗性遺伝子の存在をサザン分析で確認した。この後代 の費子のハイグロマイシン抵抗性は3:10分離が見られ た (Li L.et al.,1993;Plant Gell Rep.12:30~25 Gristuaらはパーティクルガンによってイネの未終版にbar、ハイグロマイジン近位性遺伝子およびのS遺伝子を導入し、ハイグロマイジンまたはピアラフォスに抵抗性でのS活性を示す植物体を得て、導入遺伝子の存在をサザン分析によって確認した(Gnristou P.et al.,1991;Biotech. 8:957-962)。

kozielらはバーティクルガンによってトウモロコシ未 然低にbar遺伝子とBr母素合成遺伝子を導入し、ホスフィノスリシン抵抗性植物体を得た。この植物体はBr母素 習白の合成と、サザン分析により導入遺伝子の存在が確 変された(koziel M.G.et al.,1993;Biotech.11:199-2 その他の方法としては、I)種子、胚とDNAの共存培 S0 養(Topfer R.et al.,1989;Plant Cell 1:133-139,Led

ax L.et al.,1974;Nature 249:17-21)、2) 花粉管への処理 (Luo and Wu 1988;Plant kol. 8fol. Rep. 6:165-11) リボソーム法 (Caboche M.1999;Physiol. Plant.79:173-176,Gad A.E. et al.,1987;Theor.Appl.Genet.75:10-16 があるが、形質転換の効率、用現性、あるいは汎用性に関して問題があり、一般的な方法とは言い騒

一方、アグロバクテリウム属価語のTiプラスミドをペクターとして用いた遺伝子導入注は、タバコ、ペチュニア、ナタネ等の双子葉作物の形質板技法として普通的に用いられている。しかしながら、アグロバクテリウム属価値の泊主は双子葉植物のみに限られ、単子葉植物には発生しないとされている(De Cleene M.1976,Bot.Rev.4.54)、1895—466)

アグロバクテリウムによる単子薬植物の形質転換に関してはアスパラガス(Bytebier B.et al.,1987,Proc.ka tl.Acad.Sci.USA.84:5345 - 5349) . そしてヤム (Diosc orea bulbifera) (Schafferw,et al.,1987,Mature 327:29-531) で報告されているが、その他の単子業植物、特にイネ科作物にはこの方法を適用できないとされている(Potrykus I.1999;Biotechnology 8:335-543)。

ものと解釈している (Grimsley et al.,1987;Nature 32 ときが最も高く (Grimsley et al.,1988;Biotech.6:185 ところ、トウモロコシストリークウイルスの恩染を確認 -189)、船垛にはアグロバクテリウムのブラスミドのv められないことから、上の観察はアグロバクテリウムが 5:177-179) 。しかし、ウイルスは核ゲノムに組み込ま わなくても増殖する可能性があるので、この結果はT-後、懸燥効率はトウモロコシの茎頂の生長点に接種した したことを報告している。トウモロコシストリークウイ ウモロコシストリークウイルス (Naize streak virus) ルスのDNAを接種しただけではこのような感染症状が認 DNAが核に組み込まれたことを示すものではない。その irc遺伝子が必須であることを示した(Grimsley et a GrinsleyらはアグロバクテリウムのT-DNAの中にト のDNAを挿入したものをトウモロコシ生長点に接種した トウモロコシにDNAを導入することができることを示す 1.,1989;Mo1.Gen.Genet.217:309-316) .

Gouldらはトウモロコシの生長点に針で傷をつけた後カナマイシン近抗性遺伝子とGS遺伝子を持った結例原作サプロパクテリウム日和を保障し、処理後の生長点を得た。この後代の種子が導入した遺伝子を持つことを間軽するためサブン分析を行ったところ、一部の種子で等数するためサブン分析を行ったところ、一部の種子で等のすらい。55・36-434。このことはアグロパクテリウム処理された生長点からカナマイシン遺技により得られた値粉体には形質成熟細胞を非影響成熟細胞が混在していたことを示す(キメラ現象)。

発明の屈沢

Mooneyらは、アグロバクテリウムを用いて小支の胚に 50

カナマインン低价性適伝子の導入を試みた。まず、矩を 酵素で処理し、細粒壁に傷をつける処理をし、その役フ グロパクテリウムを接種した。処理したカルスのうち番 めて少数のカナマインン低价性と思われるカルスが増殖 したが、このカルスから植物体の再生はできなかった。 また、カナマインン低价性遺伝子の存在をサザン分析で 確認したところ、全ての低价性カルスで導入遺伝子の構 遊変異がみられた(Nooney P.A.et al.,1991;Plant Cel 1,7issuc,0rdan culture 25:209-218)。

Raineriらはイネの配金に償をつけた後、始成の性の アグロバクテリウムA28 (priBosa2)をイネの8 品種に 処理したところ、日本地、種板5 号の2 品種で種様状の 組織の増加みられた。さらに、TーD&からホルモン 当成で子を除いたロブラスミドなカナッインン域が性 遺伝子とG2遺伝子を除いたリプラスミドを持つアッロ パケリウムをイネの低化模模したとこカナディインン 低流性カルスの増縮からられた。この低が性シルスに GA2間だ子の発見が出められたが、放甲が終を得る したはできなかった。これらのことから、アグロバクテ リウムのTーD&がイネの細胞に導入されたと解釈して いる (Raineri et al., 1990; Blotsch, 8:33 - 38)。

Cのように、イネ・トラモロコン、コムギやのイネ科の作物でもアグロバクテリウムによる適伝子導入が可能であることを示唆する研究報告が現れてきているが、向れも再現住に回覧があるほか、導入した遺伝子の確認だついても不完全で、説得できる結果が示されていなかった(Potryas 1.1990;Biotech.8:335-33)。

Charge、シャガイを経過性発生的にイネ素遊形 に付価後、シャガイを軽調性発生的にイネ素遊形 正確元子との3値元を持ったアグロバクテリウムを復 種した。処理した未熟距をGugが加増地上で特定したと ころ誘導されたかいスから再分化植物体が得られた。 用 分化植物体もよびその後代の植物体でのAca遠に子の所 在をサザン分析で確認したところ、用分化当代、後代い すわの低物体でも導入遺伝子の存在が認められたことを 権告している(Oba M.T.et al., 1993;[Plant ki). Biol. 21:491-506)。この格果は、アグロバクテリウムによ るイネの形質を換を支持するものであるが、形質を設め 率は1.06と非常に低く、供送した未熟既数250K対し、

中は1.0%に手を示して、PROJOCASSERSESSACADO、 40 正常な生長を示した単生植物体は「個体に過ぎなかっ た。イネの未数形を協加するには多大な労力を受するた め、このように低い形質転換効率では実用的なレベルに あるとは言い難い。 上述のように、イキ科作物における遺伝子導入法は、コレクトロポーンョン法およびペーティクルガン法が主義なある。エレクトロポーンョン法の場合、プロトプラストを用いるため、再生強物をはるまで規関局を関し、多大な労力がかかり、また成数間の治療により通復質で数異体が出現するという危険性がある。また、Cの

が試みられている。パーティクルガンを用いた場合、形 買板投体が得られる可能性は高いが、パーティクルガン る、実験者に対する危険性も考えられる。またトウモロ し、大量に質別することは必ずしも容易ではない。また 方法はブロトブラストからの再分化系が確立されていな い作物、例えばトクモロコシには適用できない。相胞を プロトプラスト化しない程度の酵素処理をした未熟版に ブIIカルスあるいは未熱胚を用いたバーティクルガン法 という特別な炫照が必要であり、この核照なしには形質 **転換は不可能である。また微細な金属微粒子の飛散によ** コシに対しては、生長点組織にアグロバクテリウムを感 本職免明者がこの手法によってトウモロコン形質転換体 昭気軌数により遺伝子導入を行なう方法(D´ Halluin やった、上述のようだ、トクモロコツに対しては、タイ 別のみであり、今のところ一般的な手法とは言い難い。 **ぬさせることが試みられている (Gould J.et al.,199** K.et al.,1992) も報告されているが、まだ成功例は一 の作出を試みたが、形質転換体は得られなかった(表 1)。しかし生長点を単鍵する作業は多くの労力を翌

従って、本発明の目的は従来の方法に比較して、形質 **元数から値物体の再生までの時間が短く、プロトプラス** トからの植物体の再生が確立されていない植物に対して も登風的に適用することができ、特殊な装置を必要とせ ず、さらに用いる材料の調製が容易な単子集植物の形質 転換方法を提供することである。

す影響等を鋭意研究した結果、単子葉植物の脱分化処理 特殊的に適い効率で形質転換ができること、そしてこの 本頃発明者らは、アグロバクテリウムで処理する単子 **集値物の値物組織、アグロバクテリウムの処理条件、及** びパイナリーベクターの構成等が遺伝子導人効率に及ぼ していない未熟胚をアグロバクテリウム属相密を用いて 方法には再現性があり、これによれば上記目的を達成す **ることができることを見出し、本発明を完成した。**

い未然胚の胚盤を形質転換することから成る、単子葉植 すなわち、本発明は、所望の遺伝子を含有するアグロ パクテリウム両細菌で単子薬植物の散分化処理していた 物の形質転換方法を提供する。

オオムギ苔のイネ料植物を始めとする単子集植物に目的 なった。アグロバクテリウムを用いた単子禁植物の形質 **私数方法はこれまでにもあるが、前述のとおり確立され** た方法とは含い難い。しかし、本発明ではこれまでに用 いられていない脱分化処型していない未換胚に本発明で 改良した方法でアグロバクテリウムを接種することによ り、価めて容易に遺伝子を導入することができた。本発 明の方法では材料調製が容易な未熟胚を用いるので、生 の外来遺伝子を再項性良く導入することが初めて可能に 本発明の方法により、イネ、トウモロコシ、コムギ、

S

とができる。また、形質転換は未熟胚の胚盤になされる

長点を用いる従来技術に比べて供試材料を容易に得るこ

た、スーパーパイナリーベクターを用いれば、トウモロ コンや一部のイネ品種のように培養が困難な品種にも高 ため、ブロトブラストを形質転換する場合に比べて植物 体再生までの時間が短く、変異の頻度が低下する。ま い効率で遺伝子を導入することが可能である。 図面の簡単な説明 図1は、本発明の方法に用いることができるアグロバ クテリウム原細菌に含まれるブラスミドの一例であるpT OK162の構造と本発明の実施例で用いたブラスミドpTOK2 32の構築方法を示す図である。 図2は、図1と同様にpSB1の構造とブラスミドpSB131 の構築方法を示す図である。

ムギ、コムギ、アスパラガスその他、いかなる単子葉植 本発明の方法により形質転換される単子葉植物は、特 ン、オオムギ及びコムギ等を包含するイネ科植物が好ま に限定されるものではなく、イネ、トウモロコシ、オオ 物にも辺用可能である。もっとも、イネ、トウモロコ しく、とりわけトウモロコンが好ましい。 発明を実施するための最良の形態

未熟種子の胚を言う。また、本発明の方法に供される未 正常な個体を再生する能力を有するカルスを誘導できる ンブレッド、インブレッド間の口、インブレッドと自然 本発明において、未熱胚とは受粉後の登熱過程にある く、受労役いかなる時期に採取されたものであってもよ **米熱胚胚盤を用いることが好ましい。また、米熱胚はイ** 受份品種間のら、 市販り品種の未熟胚であることが好き た、後述の形質転換後、後述の方法により、脱分化し、 い。もっとも、受情後2日以降のものが好ましい。ま 熱胚のステージ(熱期)は特に限定されるものではな

殖するカルス等の未分化状態の細胞塊を得るための処理 また、本発明において、脱分化処理とは、値物組織の 分化した細胞を配分化培地において培養し、無秩序に増

4. Jin, S. et al., 1987; J. Bacteriol. 169: 4417 - 4425, K きる。Cれらのものの多くはAgrobacterium tumefacien s出来のTiブシスミドのグ・ルレンス領域(vir超数)由 で神入されるものである。また、小鞠らは、Agrobacter ium tumefaciens A281という強府原性の、形質転換効率 が極めて高い株 (Hood,E.E.et al.,1984;Biotech,2:702 Fiブラスミド又はRiブラスミドを持つ、従来より双子葉 植物の形質転換に用いられているものを用いることがで しようとする形質を担う遺伝子はこのベクター中に挿入 されるか、またはこのベクターとは別のブラスミド中に 存在し、相同相換え等によりTiプラスミド中にin vivo -709, Hood, E.E.et al., 1986; J. Bacteriol. 168: 1283 — 来のDNM領域を含むベクターを有しており、植物に付与 omari, T., 1989; Plant Science 60:223-229, ATCC3734 1290, Komari, T. et al., 1986; J. Bacteriol. 166:88-9 形智転換に用いられるアグロバクテリウム原細菌は、

-」と呼ぶことがある)を開発した(特関平4-222527 数(vir函数)由来のONA図数を包むベクケー(本明哲色 において、このベクターを「スーパーパイナリーベクタ り)。本発明では、このようなスーパーパイナリベクタ 9) に含まれるTiプラスミドpTIBo542のヴィルレンス領 ーを好ましく用いることができる。

びAgrobacterium tumefaciens中で増殖可能であるpTOK1 は、単子集植物に導入しようとする遺伝子がpTi8o542の 由来の既にクローン化されていた上記15.2キロベースの このようなスーパーパイナリーベクターの例として可 SAと呼ばれるブラスミド (Tiブラスミドから誘導された **短棋を包むプラスミド)にpTi8o542のヴィルレンス短数** Youl断片(virg,virg,Virc各遺伝子を合む)を組み込ん してカナマイシン耐性遺伝子が配列されており、この例 その構造を図1に示す。このブラスミドは、大脚菌ねよ 紀列とその間に単子集植物に導入しようとする遺伝子と 公知のpc412プラスミドとpvc(101と呼ばれる公知の広 だものである。このpTCK154には、T倒坂の2つの境界 グェルレンス領域由来のクローン代されたDNA断片を含 OCLG2 (特開平4-222527号)を挙げることができる。 宿主域ブラスミドから後述の方法により構築された、 有するブラスミド上に配置されている例である。

しも容易でないことがある。このような場合にはAgroba (Herrera-Estrella, L. et al., 1983; EMBO J.2:987-95 とが可能になる。すなわち、例えば、先ず、pTOKIQをA ろ、pBR322誘導体の選抜マーカーとしては、トランスポ 単子葉植物に組み込もうとする所望の遺伝子は、上記 (類似のブラスミドを含む)を導入する。pTOK162のDNA にはpR322と相同な部分があるので、pBR322誘導体は相 とになる。pBR322はpTCK162と異なりAgrobacterium tum hた状態 (pTOK162::pR32288単体という) でなければA 特性(紫剤耐性等)について選抜すれば、pTOK162::pBR り組み込むことができ、ブラスミドが有する薬剤耐性等 cterium tumefaciens細胞内のin vivo系での相同組換え Horsch, R. H. et al., 1984; Science 223: 496-498) grobacterium tumefaciensに導入しておいて、この菌を 322誘導体を有するAgrobacterium tunefaciensを得るこ 数の趙威郎伯を持しものは、通ばのサンクローソバング 利用することにより、目的のDNAをpTOK162に導入するこ efaciens中では複製できないので、このような組み込ま unefactionsK各種のブラスミドを導入して研究したとこ の手法では所型のDNAをT領域内に導入することが必ず さらに所望UVAを導入したpBR322と呼ばれるブラスミド 同配列を介した組換えによりpTOKI62に組み込まれるこ とができる。さらに、pTOCL区を有するAgrobacterium る。もっとも、図1 K示すpTOK162のようK、大型で多 い。そして、pTOKIG2とpBR322誘導体の各々に特異的な グラスミドのT-DNA領域中の制取解素部位に存法によ grobacterium tumefaciens中で生存することができな の過当な遊択マーカーに落ついて遊択することができ

标件3328818

9

子を導入することができる。またその他の場合には、pB />Tn7 (De Greve, H.H.et al., 1981; Plasmid 6:235-2 **にいることが対思した。 徐った、 すたた所 纽の道田子が** のブラスミドに抑入すれば、Agrobacterium tumefacien 外の相同組換えにより、piucicoTが域に所宜の遺伝 能である。カナマイシン耐性をマーカーとして耐物を形 質気換した場合、両丁質数とも導入される場合も相当の 比率で生じるわけであるので、目的遺伝子の導入は十分 48) 山来のスペクチノレイツン耐性遺伝子 (タト) が優れ 用意しておいて、これに所知の遺伝子を如人する方法も 子と所知の遺伝子を別々のT領域中に配置することも可 pBR322にクローン化されている場合には、SP遺伝子をそ 最終的に、proctoc上において、カナッイシン団在遺伝 達成できる。また、阿丁俶伐が別々の染色体に組み込ま **れる場合もあり仰るので、彼に目的の遺伝子をカナマイ** R322出来のDNAとSP遺伝子から構成されるブラスミドを 考えられる。この際、丁俶城の境界配列を活用すれば、 シン耐性遺伝子から分離することも可能となる。

奇生となるアグロバクテリウム風極菌としては、特に 限定されないが、Agrobacterium tumefacionsを好まし く用いることができる。

ことができ、例えば、細菌の三系交雑手法(Ditta,G.et パクテリウム関細菌に導入する操作は従来法により行う al.,1980; Pro. Nat1. Acad. Sci. USA 77:7347-7351) (C ブラスミドをAgrobacterium tumefacions母のアグロ より行うことができる。

このようにして関駁されるアグロバクテリウム反相箇 には、pTOK162由来のヴィルレンス能力の語いDNAが合き れるので、高い効率で単子集団物の形質転換を行うこと が可能である。

る遺伝子は、従来の技術と同様に丁領域の境界配列の間 **に配置されるものであるが、アグロバクテリウム原相僧** 中で、Tiブラスミド上に配置されてもよく、または他の 尚、本発明においては、母子集価物に導入しようとす ブラスミド上に配置されてもよい。

アグロバクテリウム団組営で甲子栗植物の未熟配を形 質転換する方法は、未熱胚をアグロバクテリウム属相臼 ば、10~10~細胞/m)程度の細胞温度のアグロバクテリ ウム国相関魅烈液を驾撃し、この監査液中に未然配を3 ~10分間程度浸漬後、固体培地上で数日間共存培養する と単に接触させることにより行うことができる。例え

ことにより行うことができる。 形質転換に供する未熟胚 アグロバクテリウム属細菌を用いた植物の形質転換方法 では、アグロバクテリウム麻粕菌と接触させる前に、2. **厩発明者らはこの脱分化処理が不安であることを見出し** た。よって、本発明の方法は、従来の方法に比べて簡例 は、2,4- D共存下での培養等の既分化処団を行うこと 4-Dとの共存均益等の既分化処理を行っていたが、本 なく、未熟胚をそのまま形質転換処理に供する。従来、 であるという利点を有する。さらに、植物によっては、 S

い。形質転換細胞からの植物体の再生は公知の方法(Lin C.E. and Phillips, R.L., 1975; Crop Science 15:417-42 り配分化され、配分化状態で形質転換細胞の遺抜、増殖 形質転換した未然胚は、その後、公知の方法(Green, 1, Ouncan, D.R. et al., 1985; Planta 165;322 – 332) K 🖈 を行うことが好ましい。遺抜は、前記所望の遺伝子の発 ppotto, E. and Lusardi, H. C. 1988; Naydica XXXIII:163-る。なお、これらの具体的操作の一例が下記実施例に詳 正常松性を有する形質転換植物体を再生することができ 177) により行うことができる。これにより所望の形質 正常個体再生能力を有するカルスであることが好まし **を獲得した極物体、好ましへは、所望の形質を獲得し、 頃に基づいて行うことができる。股分化状態の細胞は、** 低されている。

2

5。 もっとも、本発明は下肥実施例に限定されるもので 以下、本発明を実插例に基づきより具体的に説明す

汉斯堡

R

(1)供送組織の開放

(二) トセキロコンの四葉

k Mexican Sweet) ,F1 (A188 x B73Ht) ,F1 (B73Ht x A t, WIITHE, Ch43, H99, W64A HE rhm, F1 (A188 x Blac (CL03 × A188) を材料として適定した。P3732は磐田酪 製協同組合より入手。全てのインブレッド及びBlack Ne rican Sweetのいずれの品種も異林木鹿名生物資源研究 トウモロコシ品積P3732, A188, H84, B37Ht, Mo17H 188) , F1 (1184 x A188) , F1 (MO17/11 x A188) , F1

(ii) イ**キの**唱陶 **沂から入手した。**

\$

日本福品種、月の光を選定して供試した。

(イイミi) トクモロコシ選回組織の調製

亜塩紫酸ナトリウムに5分間浸液後減道水で3回洗浄し 7c。 洗净後15個体结婚(1.5主要塩類,1.5換量塩類(Lins トウモロコン程子を70%エタノールに1 分間、1%次 maier E. and Skoog F. 1965; Physiol. Plant. 18:100-12 塩、1mg 1チアミン塩製塩、100mg 1ミオイノシトール、 7)、0.5mg ml ニコチン観、0.5mg 1ピリドキシン指観

S

約4日後、発芽した幼苗から頂塩分裂組織を含む約0.1 2.3g 1ゲルライト)に脳床し25°C、照例下で培養した。 ,00mg 1カザミノ酸、700mg 1ブロリン、20g 1ショ梅、 ×0.3mの価額を切り出し材料とした。

(1v)トウモロコン未然居の讃歎

花粉受粉後約14日目に雌穂から長さ1~2mの未熟胚

(v) イネ状熱肝の調製 を無菌的に単鍵した。

開花後、7~12日目の未熱種子を餌を除去した後、70 間浸漬することにより消毒した後、未熱胚を取り出し供 %エタノールに30秒、1%次亜塩素酸ナトリウムに10分 故材料とした。

(2) バブラスミド

ハイグロマイシン抵抗性遺伝子 (HFT) 、ホスフィノ スリシン (PFT) 抵抗色道伝子 (bar) およびGAS遺伝子 をTiプラスミドのT-DNA銀板に組み込んだ、以下のプ ラスミドを作製した。

(i) pIG121Hm;

遺伝子と、ハイグロマイシン抵抗性遺伝子と連結したブ (現代化学增刊, pp.123-122)。名古風大学, 中村氏 ヒッのカタシーゼ遺伝子の第1イントロンを含むGOS ラスミド (中村ら、1991;植物パイオテクノロジーロ

(ii) pT0k232: より入手)。

In/油茶のスペクチノマイシン抵抗性道伝子を含むCla (a) イントロンOLSもよびハイグロマイシン抵抗性遺 **爪子の中国ペクターpIOC29への導入**

つ、これをptC19のSma 1部位に移入り、アンドシリンお よびスペクチノマイシン抵抗性遺伝子を持つブラスミド で処理し、スペクチノマイシン抵抗性遺伝子を含む2.5k 始片をpGA482のEcoR I、Hind III断片 (2.71b) と連結 し、スペクチノマイシン抵抗性遺伝子とHind III、Hoa pTOKL07 (5.2kb) を得た。pTOKL07をEcoR I, Hind III I断片 (2.5ta) をクレノー処理により未満を平滑化 I部位を含むpTOK170 (5.2kb)を得た。

(pCAACCTTG;タカラ酒造コード4660P) を挿入した。35S プロモーターおよびイントロンGDを含む断片をHind 11 抵抗性遺伝子を連結したpGL2 (J. Paszkowski, Friedrich **しpGL2-1G (7.614) を得た。なお、pGL2はpDH51 (Met** pTDK170をHpa 1処理して得られた断片をpG12-100) 1.,1990,名古因大学中村氏より譲渡)をEcok Iで切断後 Iにより切り出し、35Sプロモーターにハイグロマイツン 5868) にハイグロマイシン抵抗性遺伝子 (Gritz L.and 355プロモーターにヒマのカタラーゼの第1イントロ razak et al.,1986;Nucleic Acids Research 14:5857-Davis 3.1983;Gene 25:179-188) を挿入じたものであ ンとOLS遺伝子を連結したベクターpIQ21 (Ohta et a Miescher Instituteより入手)のHind III部位に挿入 Fw II断片 (5.2ね) と逆結しpTOG29 (10.11ね)を得 クレノー酵素により末塩を平滑化しHind IIIリンカー

H

8

れた菌には両ブラスミドの組換えによって生じたブラス ミドのみが合まれることになる。スーパーパイナリーペ クターにハイグロマイシン抵抗性遺伝子、イントロンGJ S遺伝子が組み込まれたプラスミドをpTCK232と呼ぶ(図 リウムA281由来のAire、AirC、Airci面に子を挿入して移 持つので、スペクチノマイシン、カナマイシンで選抜さ 両ベクターは大脇菌ブラスミドpBR322に由来する部位を スーパーパイナリーベクターに物角原性アグロバクデ (こイグロマイシン抵抗性適化子、イントロンGNS遺伝 たスーパーパイナリーペクターpTOK162への目的遺伝子 子)の導入は相同組換えによって行なった。すなわち、 (b) スーパーパイナリーベクターpTOK162への導入

性アグロバクテリウムA281由来のvir倒域。「ORIJ はCo はホスフィノスリシン抵抗性遺伝子、「IG」はイントロ 位、「K」は制限酵素kpn I部位、「H」は制限酵素ktn なお、図1及び後述の図2において、「59」はスペク ンCOS遺伝子、「BR」はTーDNAの右ボーダー配列、「B こ tt I - DWの左ボーダー配列、「vie,C,C] は独成屋 チノマイシン抵抗性遺伝子、「hft」はハイグロマイシ 子、「TC」はテトラサイクリン抵抗性遺伝子,「BAR」 ン抵抗性遺伝子、「NPT」はカナマイシン抵抗性遺伝 |E1の複製開始点、「COS」はラムダファージのCOS部 d III部位を示す。

(a) pSBL3Lの情報 (iii) pSB131

8とした。pVS138をEcoR 1もよびAsp718で切断し、T4 D wポリメラーゼ処理後、Sal Iリンカー(5' - CGTCCAC pTOKI70をBarik 1およびBql IIで切断後配取し、pYS13 C-3')を挿入し閉環しかS151を作成した。pvS151をS し、14 DNAポリメラーゼにより平滑末端化後、Hind III リンカー (5' - CAACCTIG-3') を挿入し閉環し、仰 られたブラスミドをpIOK246と命名した。pIOK246をHind Dordrecht、1988)のT-DNAを含む4.7kbのSal I断片を 導入しpIOK235を作成した。pIOK235をSac 11部位で切断 IIIおよびEcoR Iで切断し、T-DNA中の大部分のDNAを - ターとイントロンGJSを含む3.114のHInd III港ボを替 Molecular Biology Manual A3:1—19,Kluwer Academic, al Iで切断し、この部位に、pGA643 (An et al.,Plant 除去した後、355プロモーターにホスフィノスリシンア セチルトランスフェラーゼ遺伝子 (特表平 1 – 503434) を接続した遺伝子(bar遺伝子、植物にホスフィノスリ シン耐性を付与する能力を有する)を含む2.2kbのlind III-EcoR I断片を挿入しpSR25を得た。さらに、pSR25 をhind IIIで切断し、pIQ21より印建した、355プロモ 入しpSB31を作製した。すなわち、pSB31は、T-DW伽 域中に、植物中で発現するイントロンGUS遺伝子とホス

特許3329819

没集のIBNd (ロ)

fc. pvCk1010をHind IIIとXno Iで切断し、Hind III-S 斯し、2.744断片を除去し、pTOK236の2.7% Xba I-Eco ITで切断後間環する操作を行ったところ. Rgl 11節位が al Iで切断したpuciaと結合しpuckasoを作成した。ptox 150をHind IIIで切断し、T4 DNAポリメラーゼ処理後Eco EcoR 1により包括し、T4 DNAボリメラーゼで包围後路環 を作成した。pTOA236をXba 1およびEcoR Iで分解し、2. pVOCIO1 (Knauf et al., Plasmid 8:45-54, 1982) & することによってEcost I部位を削除した。さらに、Bal - (5′-crccacc-3′)を抑入と問題してproc36 6d数片を単微した。pIDK239をEcok 1なよびなa 1で切 R Iリンカー (5' -cccATTCCG-3') を挿入し記録 pTOIC239とした。pCA482をitpa 1む切断し、Xho 1リンカ クセプターベクターの一種であるが、T-DNAやグェル することにより、Hind III部位をEcoR I部位に変換し、 R I肪片を抑入し閉環してpMB1を作成した。pMB1は、ア 即除できたので、このブラスミドをpvcx001Qと命名し レンス観域由来のDWなどは含んでいない。

(c) pSBIO錯版

2

ure Gollection受託毎号37349)のヴィルレンス匈奴の 組込んだいイブリッドベクターを作成した場合、ヘルバ DNB1をKpn Iで切断し、pTiBo542 (American Type Cul **て歴頃してJenとした。pSB1は、アクセブターベクター** ープラスミドと組合わせることにより、スーパーパイナ virBbよびvirG国伝子を合む15.2tg Kon 1形片を哲人し の一緒わめり、Cれた、TIPAを合む中国スクターや リーベクターを構成することができる。

(d) pSB31のpSB1への導入

pSB1に導入することによってpSB11を作出した(図2 歩 pT0Q32の場合と同様に、pSB31を相同組換えによって

(3) 奇生アグロバクテリウム

スミド(virds域を完全な形で持つ)PALA404を有する情 系であり、American Type Culture Collectionより入手 T-DNA就域を削除した協系、LBA4404とENAIO1とを苛 可能である (AICC 37349) . EMAIDIはヘルバーブラス ミドのvir観覧が遊覧原性アグロバクテリウムA281出来 土パクテリアとして使用した。LBM40Mはヘルパープラ であり、Hood E.E.et al.1986 (上版) から人手可能で (2) 項で述べた種々のパイナリーペクターをこれら 2 種類のアグロバクテリウムに導入し、以下の箇系を遺 伝子導入用として用いた。 これちのブラスミドをアグロ パクテリウムに導入する方法は桐苗の三系交雑手法 (Di tta G.et al.,1980;Proc.Natl.Acad.Sci.USA 77:7347-

LB4404 (pT0/232) LBA4404 (pSB131)

フェノスリツン型杆道衍子 (bar) を含む中間くクター

EHA101 (pIGI21Hh)

(4) アグロバクテリウム緊衝液の調粒

A的音槌(Drlica K.A.and Kado C.I.1974; Proc.Natl.A 境、0.2Mグルコース)に各々賠償し、協議度を3~5x10 アグロバクテリウムのコロニーを自金耳でかきとり、ト イネへの接債には修正AA倍地(AA正要無償塩類、AAアミ T. and Skoog, F. 1962; Physiol. Plant. 15:473-497), 1. **キシン塩酸塩、1mg 1チアミン塩酸塩、100mg 1ミオイノ** ントール、1.5mg 12,4-D、1g 1カザミノ酸、100μM /限及びAAビタミン類(Torivama K.and Hinata K.198 cad.Sci.USA 71:3677-3681) 上で3~10日間培養した Og 1カザミノ観、100μMアセトシリンゴン、0.2Mショ 数、CS数回抽数、0.5mg ml ココチン数、0.5mg 1ピリド アセトシリンゴン、0.2Mジョ塩、0.2Mグルコース)に、 5;Plant Sci.41:179—183),MS改回塩類 (Nurashige, ウモロコンへの按钮には相涵整層用LS倍地(LS主要塩 価的有に質なし用いた。

(5) 接種ねよび培費条件

供試組織を減菌水で洗浄後、茎頂組織はガラス針(自

2 リウム駐園液に3~10分間浸漬した。没漬処理後、来頂 数塩、100mg 1ミオイノントール、1.5mg 12,4- D、700 後のイネ未然胚はアセトシリンゴン、ショ糖、グルコー 京製)で穿刺後、木熱胚はそのまま上述のアグロバクテ 組織は100μMアセトシリンゴン、20g 1ショ樹、10g 1 0.1mg 1カイネチン、1.0mg 1カザミノ酸、2.3g 1ゲルラ ソリンゴン、20g 1ショ糖、10g 1グルコースを含むLSD チン数、0.5mg 1ピリドキシン塩酸塩、1mg 1チアミン塩 C、暗黒下で1~5日間培養した。その後、洗浄するC となく(洗浄すると形質転換植物の再生効率が低下)接 都路的場(LSDI. 1米が配着からグルコース、アセトシリ ンゴンを除いた組成)で培養を妨けた。また、設積処理 ミン類 (Onu C.C.1978 Proc.Symp.Plant Tissue Cultur Jan 12,4- D、2g 1ゲルライト)に移植し、25.C、暗瓜 し、回過度のセフォタキシムを含むLS倍地で培養を結け 1.5共存语法(LS主责如题,LS级重知题,0.5mg ml = 3 mg 1プロリン、500mg 1 NES、8g 1条天)に移館し、25 ドで2~5日間培養した。その後、接種未熱胚を250mg 世未熱胚を250mg 1セフォタキシムを含むLSD1.5カルス スを回ば度で含むZNG固体倍換(NGの無機塩およびビタ た。役債処理後のトウモロコシ未熟胚は100μMアセト |セフォタキシムを含む

は

近水で

が

ゆっち

かった
 グルコースを含む修正LS倍地(LS主要塩類、LS換量塩 イト)に移储し、25℃、照明下で2~3日間培養した。 e,Scionce Press Peking,pp 43—50) 1g 1カザミノ酸. **荷、1mg 1チアミン构製街、100mg 1ミンイノントール** 説、0.5mg Elit ロゲン類、0.5mg Jパリドキツン独製 その後、250mg 1セフォタキシムを含む設樹木で洗浄

r タキンムを含む2NG間体培地で3日~1週間培養を行 (B) aus泊柱の設治方法

共存培養処理直後、組織を0.1%Triton X-100を含む

- D - グルクロン酸(X - gluc) および20%メタノール **橋数に対する百分率で表した。また、遅抜処理後得られ** た形質板換幅的と考えられるハイグロマイシンあるいは ホスフィノスリシン抵抗性カルスおよび形質転換植物体 置した。リン酸极衝液でアグロバクテリウムを除去した 後、1.0mMSープロモー4ークロロー3-インドリルーA を含むリン散极衝液を認加した。3FCで24時間処理した 後、青色の皇色を示す組織を顕微鏡下で観察し、供試組 でのaisf性の判定に関しては、抵抗性カルスおよび植 0.1Mリン製板資液 (pH6.8) に没近し、37Cで 1 時間部 物体の一部を切取り回様な方法によりGLS染色を行っ

(7) 形質転換細胞の遺抜と植物体再分化

イシンまたは0~20mg 1 PPTを含むLSD1.5カルス増始培 地で約8週間培養し抵抗性のカルスを選抜した。 この抵 抗性カルスを30mg 1ハイグロマイシンまたは 0~20mg 1 を除き、50mg 1ゼアチンを加えた組成)に置床し、25℃ アグロバクテリウムを接種したトウモロコシ未熟胚を PTFを含むLS/拾地(LSDL.5カルス協道培始から2,4~D 250mg 1 セフォタギンムおよび0~100mg 1ハイグロマ 照明下で培養し再分化を行った。

イネ末熱胚を250mg 1セフォタキシムねよび50mg 1ハ イグロマイシンを名む2M個体结地で3~4週間結婚

D、0.5mg 16BA、30g 1ンガバトール、20g 1ショ絵、2g グロマイシンを含む植物体再生用のN6S3培地(12減度N6 し、抵抗性のカルスを遺抜した。さらに、この抵抗性カ 1ゲルライト)で2~3週間培袋したのち、SOmg 1ハイ 主要無偽塩類、NG微型無偽塩類、N6ピタミン類、1g 1カ がミノ桜、0.2mg 1 NAA、1mg 1なイネチン、2g 1グルラ ルスを100mg 1ハイグロマイシンを含むNG-7 位地(NG **無数哲類、N5ピタミン類、2g 1カザミノ酸、Jud 12,4-**イト)に移植した。なお、焙塩にはすべて250mg 1セフ * タキンムを添加した。

(8) トウモロコン形質転換次世代における導入遺伝子 の発現 LBA404 (pSB131) を接續しPPT遺抜により得られた形 子の発現を調査した。またこれらの幼苗の葉の一部に50 ()倍に希釈したバスタ(Hoechst, PPTを主成分とする除草 tc. LBA4404 (p1OK233) を接種しいイグロマイシン選抜 により得られた形質転換植物も非形質転換植物 (品種A1 質転換当代植物を自殖し次世代種子を仰た。これらの種 に形質転換当代植物を非形質転換植物 (品種A188) と交 配後約2週間目の未熱胚を採取し10mg 1 PPTを含むLSD 子を堵程後約2週間目の幼苗から葉片を採取しcus遺伝 **類)液や数布し2適回回にPPF塩抗性や間強した。さち** 1.5カルス誘導特地に図床した。25℃、暗黒下で3週間 88)と交配し、次世代植物の幼苗での5遺伝子の発現を 培養後カルス形成の有無を指標に PPT抵抗性を調査し

(9) サザン法による導入遺伝子の分析 ន

特許3328819

2 Molecular Cloning (Sambrook et al.1989;Cold Spri ng Harbor Laboratory Press) K配数の方法に従って行 菌系LBA4404 (p58131) を接種し、PPT遺抜により得ち れた形質転換体当代もよび次世代のトウモロコン幼苗か 5小鶴ろの方法(Komari et al.,1989;Theor.Appl.Gene 阪酵素Barli 1を処理し、GIS遺伝子およびbar遺伝子をブ 末猶までのDNA質域の長さはCIS遺伝子で約2.3kb, bar道 t.77:547-552) に拾いONAを抽出し、抽出したONAZ他 た。T-DNA村邸のBank Iサイトからしボーダー配列の 伝子で約2.74である(図2)。なおサザン荘について ローブとしたサザン法による導入遺伝子の検出を行っ

(10) トウモロコン塞頂組織への遺伝子導入

.95:426-434) による生長点組織(基頂組織)を材料 * GouldSの報告 (Gould J.et al.,1991;Plant Physio

点近傍は非常に微細な組織であり、そこに穿刺しアグロ パクテリウムを屈染させることは容易でない。 本実験の **転換には生足点の切り出し、穿刺などに熱傾した技術が 枯果から生長点近傍へのアグロバクテリウムによる形質** *とした形質転換が可能であることを確認するため、何述 のアグロバクテリウム協系EIM101 (pICI211m) を印憶し たトウモロコン客田組織の処国し、生長した値物体での グロバクテリウム処理した組織では針で穿刺した部分に QIS活性を関金した。アグロバクテリウム非処理の組織 ろ、QLG遺伝子の発規を示すものは全くなかった。生長 ではいずれもdis遺伝子の発現はみられなかったが、ア GS遺伝子の発現が小さな点状に認められた。しかし、 その後培養を続けた植物体でGLS活性を調査したとこ 必要であると考えられた。

表1 トウモロコシ茎頂組織への遺伝子導入

供料租益数	生長した植物体数	得られた 植物体数	G U S + 菌物存践
2.4	6	2	0
2 6	∞	9	0
1.7	1 3	ഹ	0
14	-	0	0
4 5	1 4	7	0
3.2	f 1	∞	0
3.0	2	-	0

供試品種はいずれもP3732

トウモロコシ未熱胚を材料として、アグロバクテリウ **遺伝子発現がなされた。また、EHA101(pIG121Hm)、LB** ムを処理した場合、供試したいずれの品種でも高率でCU ではっきりと確認できる大きさであり、広範囲の細胞で S遺伝子の発現がみられた。 dIS遺伝子の発現部位は肉眼 (11) トウモロコシ米熱胚への接種

からアグロバクテリウムによる形質転換法において、米 40 の遺伝子発現率の数は認められなかった。 これらのこと A404 (pTCIC 32) および(BA40A (pSB131) の商系間で

熱胚は安定して高率の略像を示す適当な材料であると判 逝される。

特許3329818

 Ξ

22 トウモロコン未熟胚へのGUS遺伝子導入効率 祝っ

z

製品	光图	603+組構数/供試組織数(%)
881A	-	32 32(100)
A188xB73Ht	_	32 32(100)
B73Htx4188	_	76 77(99)
BMS:x1188	_	63 63(100)
A188	61	65 66(98)
H84	61	26 30(84)
B37Ht	۵	20 20(100)
Mol 7Ht	~	24 25(95)
1117Ht	2	(001)51 51
Oh43	2	17 20(85)
H99	Ċ1	25 25(100)
134.1 Ht rhm	ç.	10 10(100)
A183xB73Ht	¢)	34 34(100)
B73Hrx1183	c i	49 49(100)
BWSxA183	61	29 59(100)
4133	e	15 16(94)
H34xA133	e	20 20(100)
Vol7Ht x A185	es	8 10(80)
C103xA183	က	11 11(100)

BNS:Black Mexican Sweet

商系 1:EHA101(p16121Hm), 2:LBA4404(pT0K232), 3:LBA4404(pSB131)

抜効果が確認された(表7)。

ンを含む79Sppの飯域を増幅させるブライマー(5′-C ACCITIATOAACTACCCACA-3'. 5' - TAAAAACCCCACCAC AACATIG - 3′)を用いた PCRを実施した。1,8A4404 (5TO

C32)を鋳型とした場合0.8kbの増塩断片が検出された が、抵抗性カルスおよびアグロバクテリウム非感染カル

(12) 前倍養したトウモロコシ未熟胚への接種 (比較

2日間培養(戦分化処理)した未熱胚を用いている(G) Chanらはイネのアグロバクテリウムによる形質転換の が算なngata (n 出数抽盤、n 殺害有益、n アタミン 数、3%ショ森、0.8%アガロース、2mg 12,4−D) た an M.T.et al., 1993; Plant Nol. Biol. 22:491-506) .

あるかを確認するため、LSD1.5カルス誘導培恤で2日間 ムによる形質転換を試みた。接種および共存倍要は前述 **培養した未熟胚 (品種A188) を材料にアグロバクテリウ** トウモロコン未熱胚を用いた場合にもこの方法が有効で の方法に従った。供試菌系はLBA404 (p58131) とし

た。対照として採取直後の未熟胚を同様に試験に供した。 共存培養3日目に両試験区の未熟胚をdx染色した 8

特許3329819 3

った(表3)。このことから、前培養した未熱胚を材料 とした場合、トクモロコンの形質転換は達成されないと とが明白である。 を接種した未熟胚では染色されるものは全く見られなか ところ、採取直後に接種処理を施した未熱胚のほとんど が染色されたのに対し、前培養後にアグロバクテリウム

表3.前培養したトウモロコシ朱熱胚へのGUS遺伝子導入効率

GUS+組織数	1 9
供試組織数	2 1 2 0
未熟胚	2 日間培養 採取直後

抜し. 75mg 1ハイグロマイシンを会む培地で抵抗性の論 30mg 1もよび20mg 1ハイグロシイツン資価結合上で超 (13) トウホロコシ形凹転数価値の複数

されなかった。このことから、抵抗性カルス全体でみら **44也上で指揮したコンパケトで、こる状のカルスは形質** るものであり、段階的にハイグロマイシン協度を高めた スから抽出したDNAを辞型とした場合、地位断片は検出 hたous遺伝子の発現はカルスに付着したアグロバクテ リウムによるものではなく、導入されたans遺伝子によ 図をしたカルスをGLS数色したところ、カルス全体でGLS 遺伝子の発現が認められた。 このカルスから小朝らの方 法 (Komari et al.1989;Theor.Appl.Genet.77:547-55 2)に従い抽出したDNAを鋳型とし、QUS遺伝子を増幅さ

(14) トウモロコン形質転換値物体の遺抜 転換体であると考えられた。

> 反応 (PCR) を実施した。反応は、1 μ I のDNW溶液、5p Mの各々のブライマーの混合物、2004MのdATP、dCTP、dS TPなよびdTTP、PG检衝液(短過遊社製) なよび2.5UのA

mplitad DWvポリメラーゼ (宝酒造社製)を使用して全

5、-ATGCTCCCCACCACACTIC-3、)を用いて複製遊戲

せるブライマー(5'-ATGTTACGTCCTGTACAAAC-3'、

共存培益後、30~100m 1のハイグロマイシンまたは

汗ったところ、ハイグロマイシン遺抜では供ばした末热 植物の葉をack性色したところ多くの個体でack道伝子の ると考えられた。形質転換植物の得られる頻度は特にア ゲ(GB-)個体が少なく、単分化時のPFI裕恒による道 く常に供試した未愁胚の10%以上のものから独立の形質 る。次に接種からカルス増殖まで同じ条件で培費、選抜 されたPPI抵抗性カルスを高温度(20mg 1)のPPIを含む し、再分化した植物体のQLSAR以と製査したところPPTを カルスが符られた (表4、8)。 これらのカルスをハイ したところ商率で植物体の再分化がみられた。 再生した 転換植物が得られた(表8)。 このことは本法が安定し て高知度で形型転換がなされる方法であることを示唆す 用分化倍地とPPTを含まない用分化倍地にそれぞれ関床 含む结地で用分化した植物体ではキメラ個体やエスケー Rの11~22%、PFA放びに回じく35~62%から抵抗和 発現が認められ (表5,6)、これらは形質転換値物であ 5~20mg 1のPPTを含む培地上で抵抗性カルスの遺抜を グロマイシンまたはPPFを含む植物体料が光味地の関係 TC遊抜を行った場合に高く、また実験間での恐も少な

り94℃、2分間にわたり55℃、および3分間にわたり72

よって分離した。アグロバクテリウム非感染カルスかち

から抽出したDNAを複型とした場合、属気決動によって

'C' KR生成物を、0.7%アガロースゲル上で電気泳動に 抽出したDNAを鋳型とした場合、DNAの増幅断片は検出さ わなかったが、LBA4404 (pTCK232) および抵抗性カルス 1.8kbpの増幅断片がエチヂウムブロマイド染色法により 検出された。また、アグロバクテリウムのVird間拾コド

(パーキン エルマー セタス社製) 中で:1分間にわた

イルに従って30周期を繰り返した ;ONAサーモサイクラー

容積10041で行なった。反応は下記の温度のプロファ

3

特許3329819

ハイグロマイシン選抜によるトウモロコシ未熟胚の形質転換効率

歌 ()	ハイグロマイシン 路抜経過(mg l)	ハイグロマイシン ハイグロマイシン 路抜経過(mg 1) 抵抗性カルス数 / 供試未熟胚数(%)
	0-30- 50	5 22(23)
2	0-30- 20	6 22(27)
က	0-30-100	2 19(11)

ハイグロマイシン選抜は共存培養後、各磺度で2 ~3 週間ずつ培養した。

ハイグロマイシン選抜による形質転換植物体の選抜効率 説

実験	ハイグロマイシン 抵抗性カルス数	植物体 再生カルス数	G U S + 植物体数
-	64	11	ıc
2	ខ្ម	∞	!
က	50	က	2

PPT 選抜による形質転換効率 数6

(25)000		
(66)007	11(20)	44(12)
42(35)	31(26)	20(17)
28(41)	17(25)	9(13)
.28(64)	6(20)	6(14)
i	28(41)	

各欄の未熟胚数および植物体数はクローンを含まない数

3

特許3328818

表で、再分化培地中へのPPT 添加が再分化効率および形質転換効率に及ぼす影響

	.,	o
杂色库	-Sno	9 27
¢øGUS∮	キメラ	17
再分化植物体のGUS染色率(%)	-Sno	74
- N	サガル カルス数(%)	335(47) 184(53)
‡ *	氏的カルス数	714
	PPT 液苔	+ 1

-: 0 mg l PPT添加濃度 +:20 mg 1,

(15) トウモロコシ形質転換当代における導入遺伝子の

形質転換体の全DNAをBamtで切断した断片に対してba rおよびGOS遺伝子をブローブとしたサザン法により形質 転換当代における導入遺伝子の検出を行った。いずれの 遺伝子をプローブとした場合でも供拭した全ての個体で 1~数コピーの導入遺伝子の存在が認められた(数 8)。プラスミドpSBJJの中ではbar遺伝子を含むfbarh 断片は2.7kb、GVS遺伝子を含む同断片は2.3kbであるの

た校出されたDA地所の及さは出来の違う個体では全て 異なった。これはトウモロコンの独色体への遺伝子導入 個所がそれぞれ異なることを示すものであり、超物体内 ドが認められた。このことはbar、cusの両道伝子とも値 20 物染色体に組み込まれたことを異付けるものである。ま でのパクテリアの残存によるものではないことが確認された。 に対し供試した全ての形質転換体には約3kd以上のバン

(15)

特許3329819

8

) .

サザン解析による形質転換当代における

£ ₩ 8 導入遺伝子のコピー数

						_										
コルスト	ens	ı	2	-		-	-	-	2	-	-	61		~		
導入遺伝子コピー数	bar	1	2	2	6	2	2	2	2	က	61	2	-	-	-	
3. 8. 14. 14. 14. 14. 14. 14. 14. 14. 14. 14	万里特农前 (山大)	対照	丘換体]	2 a	2 b	က	4 a	4 p	S	9	1	œ	es O	9 G	1 0	

(16) pioc33を導入したトウモロコシの次世代における導入遺伝子の発現と分析 ハイグロマイシンによる遺状後得られた形質転換値物

と非形質析験植物を交配して切られた次世代植物の既を GS集色したところGS保住と権性の比は、ほぼ1:12分 館し予思された分離比に適合した(表9)。

(16)

特許3329819

表9 ハイグロマイシン選抜によるトウモロコシ

দ

形質転換個体の次世代における導入遺伝子の発現

a 体数	GUS発現	沙	S	ß	ဖ	
次世代個体数	0 n s	第	0	4	ເດ	
	形質転換個体		対照	転換体 1.1	1.2	

(17) pSB11な導入したトウモロコンの次世代における 導入遺伝子の発現

対照品種の葉を30x独色したところ全て存住であった のに対し、形質転換値物を自殖して得られた次世代の葉は1個体を欲き全て陽性を示した。さらにこわらの協物 体にバスタを塗布したところ対照品種の素は約2週間で 全て枯形したが形質転換次世代の薬は20x路性を示した 個体を除き全て健全であった(表山)。QX遺伝子の発 現、PPI抵抗性ともに2因子介轄に適合する遺伝的分離

8

を示した。次に対照品種より採収した未熟所をPPI告有 培地で培養したところ全ての未熟配が特別を抑制されか ルス部等はみられなかった。これに対し形質転換値物と 非形質転換値物を交配して得られた次世代協物から採取 した未熟配では供試した研系様とも置床した未熟配の的 50%からカルスが誘導され、その後同時地上で旺盛な時 殖を示した(表11)。これちの増殖したカルスを包含体 配とたところいずわのカルスでも全体が背色に呈色され た。

(17)

特許3329819

表10.PPT選抜によるトウモロコシ形質転換個体の次世代における

導入遺伝子の発現(幼苗での検定)

	g u s	執	2.0	-
数本	5	革	0	9
次世代個体数	五花柱	感受性	5.0	-
	PPT框抗性	抵抗性	0	4 9
	챑	GUS 抵抗性	ı	2
	コピー数	bar	1	2
		形質転換個体	留	転換体21

次世代における導入遺伝子の発現 (未熱胚による検定) 表11 PPT選抜によるトウモロコン形質転換個体の

次世代未熟胚数	5.抗性	感受性	9 2	3 2	2 2
次世代	PPT抵抗性	抵抗性	0	2 9	2 2
	形質転換個体		選样	転換体31	3 5

(18) pSB1.31を導入したトウモロコンの次世代における 導入遺伝子のサザン解析

在による導入遺伝子の検出を行った。植物体でのGDS遺伝子の現場が特性、PVIの受性であった個体を除き、全 表10亿元した形質転換個体No.21を目指して得られた 次世代植物からDMを抽出し資送と回路の方法でサザン

ての個体でいずれの遺伝子をプローブとした場合でも導

致し、またそれぞれのバンドの長さは形質転換当代の個体のものものと同一であった。以上の結果から本法によりア グロバクテリウムを用いてトウモロコシに導入された遺 伝子が植物の細胞の核に組み込まれメンデルの遺伝に従 入遺伝子の存在が認められた(表12)、導入遺伝子の存 在が認められた個体はいずれもbar, CUSのコピー数が一 って安定して役代に遺伝することが確認された。 8

(18)

特許3329819

サザン解析による形質転換次世代における 35 表12

導入遺伝子のコピー数

7. E. 4. 194.7	導入遺伝チョビ	ロアー数
形置有效固体 (次代)	bar	GUS
対照	1	ı
21-1	1	1
- 2	2	2
ဗ	-	1
च्या I	-	-
ıs I	0	0
9 1	7	-
7 -	-	-
8 1	61	63
6	-	
- 1 0	61	63
-11	-	-

特にスーパーパイナリーベクターを有する研系であるLB мим (рімдэз)を用いた場合に顕著に高い効率での5 遺伝子の発用が認められた (炎13)。 未熱胚においても高率でGLS遺伝子の発現が超められ、 トウモロコシ未熟胚を材料としたときと同様に、イネ (19) イネ米熱胚への接種

イネ来熱胚へのGUS遺伝子導入効率 表 1 3

 採	GUS+の組織数/処理組織数		(%)
無処理	0 / 0	(0)	
EHA101(pIG121Hm)	66/198	(33)	
LBA4404(pTOK232)	52/ 52	(100)	

この実験で使用した2種類のバイナリーベクターはア SO グロバクテリウムの細胞の中ではGLS遺伝子は発現しな

特許3329819

8

合、アグロバクテリウムはトウモロコシねよびイキの細 いことから、共存培養後のGLS遺伝子を指信とした場 也に遺伝子を導入できることが確認された。 (20) イネ形質配換植物体の適接

再生植物の葉におけるOSS現を調査したところ、いず * は、速抜マーカーを含む植物体再生培地に移植すること イネ未然既において、Song 1ハイグロシイツン溶加や 地上で低估性カルスの遺抜を行ったところ、スーパーパ イナリーベクターを有する菌系を用いた場合に、頸着に により、容易に再生植物体が得られた(表14)。また、 高い効率で抵抗性カルスが得られた(表14)。これら

イネ未熟胚における形質転換体の選抜結果 報しず

が本実描例において明かとなった。

か得られていない (Chan M.T.et al.,1993;Plant Mol.B ベクターを有する菌系を用いることにより、飛躍的にに 10 済い効率でイネ末熱胚から形質転換植物が得られること 換値物であると考えられた。アグロバクテリウムの菌系 EHA101 (piG1211h) は、強角原性のpTiBo542のヴィルレ を有していない。Chanらが用いた菌系も同様な菌系であ り、本実施例の結果と同様に非常に低い形質転換効率し ンス領域を有するものの、スーパーパイナリーベクター 101.22:491-506), これに対し、スーパーパイナリー *れの個体においてGK遺伝子の発現が認められ、形質転

面系 株式 株式性 権効体再生 薬剤 面系 未熟胚 カルス カルス カルス 無処理 40 0(0) 0(0) IVG EHA10I(pIG121Hm) 71 3(4) 1(1) BVG LBA4404(pT0K232) 77 23(30) 17(22) HVG			租織数 (%)		共
世 40 0(0) 0(0) 0(0) 0(0) 0(0) 0(0) 0(0) 0		供試	抵抗性	植物体再生	を変え
(pIG[2]Hm) 71 3 (4) 1 (1) (400) (77 23 (30) 17 (22)	米里	未熟胚	カルス	カルス	
(pIGL21Hm) 71 3 (4) 1 (1) (4) 17 (22)	田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田	0.4	(0) 0	. 0	HYG
77 23 (30) 17 (22)	EUA101C=[C193H=)		(7)	1 (1)	HYG
	LBA4404(pT0K232)		23 (30)	17 (22)	HYG

HVC ・こんグロレムツソ

12、3個体ともHT遺伝子の1.1kbの増幅断片が検出され 構造領域の両端を用いた。対照として非形質転換体のGN 調査した。QS遺伝子およびHT遺伝子のブライマーには Abよび各遺伝子を有するブラスミドDNを用いた。その 枯果, LBA4404 (pTOK2.12) を処理することにより得られ た。また、QS遺伝子についてもすべての関体で対照ブ LRA404 (pTOK232) をイネ末熱胚に処理することによ ラスミドと同様の1.8kbの均幅断片が検出された。非形 て、導人遺伝子の存在を複製連鎖反応(PCR)法により た形質転換体で、対照のブラスミドにおけるのと同様 り得られた任意かつ独立な形質転換植物3個体につい (21) イネ形質転換個体における導入遺伝子の確認

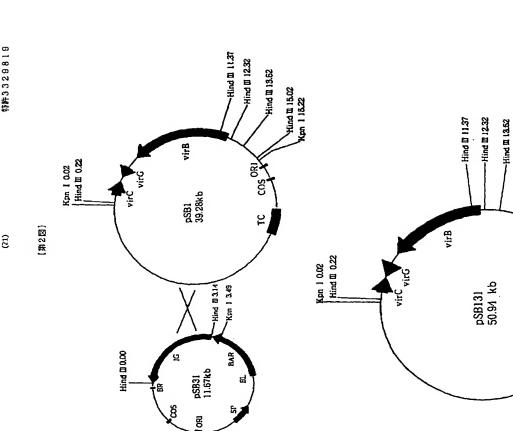
ち、供は植物体はアグロバクテリウムにより導入された **質転換体ではこれらの断片は検出されなかったことか** 遺伝子を有する形質転換植物体であることが確認され

産業上の利用可能性

て、形質低換から植物体の再生までの時間が短く、プロ トプラストからの植物体の再生が確立されていない植物 に対しても普通的に適用することができ、特殊な装置を 必要とせず、さらに用いる材料の調製が容易な単子繁値 物の形質転換方法であるので、本発明は、有用な性質を 上述のように、本発明の方法は、従来の方法に比較し 有する単子菜植物の青種に利用可能である。 6

pTOK 162 41.9kb pTOK232 52.0kb [図] (版) pTOK229 10.1kb





- Hind II 15.02 Kpn 1 15.22

ori A

BR cos

COS OTI SP BL BAR

Hind II 18.64

Hind II 21.78 Kpn 1 22.13

フロントページの結束

*

超

寄查官

(特明 平4-222527 (JP, A)
Plant Mol. Biol., V
ol. 22, No. 3 (1993,) p. 491
-506 No. 1 (1992) p. 7-16
Plant Cell, Tissuc
and Organ Cultur
e, Vol. 25, No. 3 (19
Plant Cell, Vol. 4,
No. 12 (1992) p. 1495-1505 Plant Cell, Vol. 4, (56) 参北文献

CIZN 15/84 BIOSIS/WPI (DIALOG) CA (STN) (58)関査した分野(Int.Cl.', DB名) ADJH 1/00